

## 連載／東九州龍谷高・ナムナムガールズの歩み⑤

ご縁づくりグループとして、高校生が歌や等身大の言葉で仏教に出遇った喜びを伝えてきた東九州龍谷高校(宗門校、大分県中津市)の「ナムナムガールズ」。9年間、生徒と共に歩んできた顧問の紅椏聖教諭(49、同市・雲西寺住職)は「生徒たちの心の変化は想像以上だった」と振り返る。

# 「お寺という空間が人を育てる」

学生時代に音楽活動にいそしんだ経験を生かし、担当する宗教の授業でもポップカルチャーを話題にするなど、生徒に身近な目線で仏教を伝えてきた紅椏教諭。10年前、東九州龍谷高校の職員会議で「宗門校の生徒が歌って踊る、AKB48のような仏教系アイドルグループがあったっていいと思う」と周囲を驚かせた。

「宗門校で教壇に立ち、高校生には大人以上に仏教的な視点で物事を受けとめる研ぎ澄まされた感覚があると感じていた。そうしたものを生徒自身が何らかの形で表現していくと面白いだろうなど。でも初めはあくまでも『軽いノリ』で生徒たちが楽しく輝ける活動、それだけの思いだった」と始まったナムナムガールズ。しかし、生徒たちの変化は紅椏教諭の想像以上だった。

「最初はどの子も『受け身』で、私や先輩に言われたことを聞いているだけなのに、お寺で歌ってご門徒さんに

『ありがとう』と喜ばれると、だんだん『ご縁づくり』に参加しているという自覚が出てくる。すると、行動に責任感が芽生え、ステージのセリフ1つをとっても『こんな表現で伝わるかな』と自主的に話し合うようになって。彼女たちの成長には毎年驚かされてきた。それは、お寺という空間でご門徒さんと



グループ結成を呼びかけ顧問を務めた紅椏教諭

接したということと無関係ではないと思う」と語る。

12月3日の最終公演。1年生の林田心来さんはお寺での初めてのステージで、あふれる涙が止まらなかった。「ご門徒の方たちが私の手を包むようにギュッと握ってくれて温かかった。



学校の礼法室で輪になるナムナムの生徒。これが彼女たちの日常だった

ナムナムガールズ、やめたくないって思った」。その涙は聴衆の胸も熱くさせた。紅椏教諭は「お寺で流す涙って連鎖していく。特に、若者にはそういう化学変化を起こす力が備わっているのかも」とあらためてかみしめた。

高校生と一緒にご縁をつくり、高校生にご縁を紡いだ9年間。紅椏教諭は「ナムナムガールズをしたからといって、熱心な『念仏者』になるなんてことはないかもしれない。でも彼女たちはお寺で『声に出そうよ、ナモナミダブツ!』と呼びかけ続けてきた。大人になって手を合わせた時、あの時の自分のかけ声がよみがえって、お念仏の声が自然と出てくるんじゃないかと。そんなことをちょっとだけ期待している」と語った。(おわり)